Magazine for Industrial Design

Design News

Japan Industrial Design Promotion Organization

特集：コーポレート・デザインの実験



217

カンガルー達の夏

サーフボードとインダストリアルデザイン　酒井俊彦

CLOSE UP

オーストラリアは依然リセッションから抜け出せない．抜け出せないから、仕事がない．仕事がないから、暇がある．暇があるから海へ行く．救いがたい悪循環が繰り広げられているような気もするが、ともかく、今日も浜辺は遊び人達で賑わっている．（もちろん今は夏真っ盛り！）

今年の夏はボンボラ社にとってまったく幸せな年となった．トム・ルーデックのデザインした新しいセイルボード"ゾット"が売れまくっているからである．今では誰も見向きもしなくなったポリエチレン素材を使って、他のボードの1/3以下の低価格を実現した．その上、日本のレースで優勝したりしたものだから、ほとんどお祭り騒ぎの状態である．売れないわけがない．水の上を走る"温故知新"である．「あなた方の言うデザインとは少し違うのかも知れないが、セイルボードの形が年々美しくなっていくのは事実だね．」とは笑いが止まらないジェネラルマネージャー、ロジャーの弁．この手の製品のデザインを語るとき、その専門性から職業デザイナーは言葉をなくすが、スピードのためだけに造られたシェイプは、小手先のデザインを圧倒する美しさを持っている．サーフボードやセイルボードのデザインにおいて職業デザイナーが口を出せるのはグラフィックの分野だけというのは寂しいかぎりだが、そこにはインダストリアルデザインというもののきわめて純粋な理論が存在しているようにも思える．プロサーファー兼インダストリアルデザイナーがデビューすれば、けっこうな"おしゃれさん"かも知れない．

ともあれ、パドルを使って波に乗る、カヌーとサーフボードの"あいのこ"のようなサーフスキー、正座した格好でボードに座り、ボートでひっぱってもらうニーボードなどお茶目なプロダクトには事欠かない．中でもジェットスキーのサーフボードバージョンであるウォータースキーボードは、ふくらはぎがつるほどおもしろかった（何の取材をしているのやら！）．残念ながらこのプロダクト、オーストラリアに紹介されて５ヵ月ほどしかたってないため国産品は皆無なのだが、本場アメリカのグッドデザインな物が出回っている．ウォータースキーでは国産品も健闘しているものの、フットストラップ部のデザインはいい加減で、グラフィックはなぜか"ヘビメタのり"だったりする．サーフボードのセンスのよさから比べると信じがたい状況である．ひとりこの分野で頑張っているのがベルアクア社で、今風のカラーリングとシンプルなフットストラップの処理が目を引く．マネージングディレクターのジョン・ホルストックが「社運をかけた」とまで言うこの製品、市場に出回るのは２月からだが、さてさて日本の読者の目にはどう写っているのだろうか、興味深いところである．

最後になったが、インダストリアルデザイナーが多少なりとも関与できる分野では、ボートメーカーのグリフライト社が美しいラインを持ったボートを発表している．ゴージャス一辺倒で押しまくるボートが多いなか（これは何もオーストラリアに限ったことではないのだが）、クリス・エマーソンのデザインするボートはいかにも"デザイナーがデザインした"といった印象である．「美しい製品を造ることの価値と、その製品が与えてくれる利益をわれわれは理解している．」と、公報担当のリン．ありがたいお言葉である．

とは言うものの、海で遊ぶ人達は、あんまり流行やデザインのことなんか気にしていない．セイルボードのマストが折れれば、パテでくっつけて修理するし、ニーボードがなければブギーボードで代用しちゃうのである．何といっても、日本ではほとんどお目にかかれなくなったサンマルカローラが今日も元気にそこら中を走り回っている国なのである．

●酒井俊彦
1964年高知県生まれ．東京造形大学デザイン科卒．1991年（株）コーゾーデザインを退社、渡豪．現在、J-WAVEのパソコン通信サービスのためのエッセイを執筆中．神奈川県「SURF90」優秀賞等受賞多数．

Australian Design Report — それゆけカンガルー！





❶スラロームボード「ゾット」（ボンボラ社）
❷サーフスキー「クリスト」
❸ウォータースキー「プラスワン」（ベルアクア社）



